



湘北短期大学図書館

としかんNEWS

vol.134

2020.7.1 発行

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。今年度の春は、新型コロナウイルス感染症の影響で、図書館のガイダンスを実施できず、みなさんにお会いする機会もないまま授業がスタートしてしまいました。ここ湘北の図書館は、みなさんの学びとキャンパス生活をより充実したものにするためのサポートをしたいと考えています。コンセプトは「**ミナノミカタ**」(ミナ=学生/ミカタ=味方・見方)です。図書館スタッフ一同、みなさんのご利用を心よりお待ちしております。



「ミナノミカタ」ようこそ図書館へ

図書館ホームページ

PC やスマホから本も検索できちゃう図書館のホームページを活用しよう

図書館の資料は、図書館のホームページから検索できます。その他、「マイライブラリ」から、借りている本を延長する、他大学から借りたい本をリクエストする、自分だけのブックリストを作成する等、いろいろな機能があります。自宅からでも通学中にも、PC やスマホからご利用いただけます。



ここから図書館の本を検索できます

調べたいもののキーワードを入力して検索!

図書館からのお知らせ

大切なお知らせはここ!

あなたの「マイライブラリ」

貸出の延長もここでできます!



Twitter

フォローをお願いします!



新着資料の最新情報

最新の本や雑誌がぞくぞくとアップ!

図書館の展示情報

おすすめの本を集めた展示コーナー!



Twitter フォロワーキャンペーン実施中

図書館の Twitter

図書館の Twitter をフォローして、図書館オリジナル「絵本のメモ帳」をもらおう!

イベントや、キャンペーンの最新情報、楽しい情報・役立つ情報など発信。ぜひ、フォローしてください。図書館カウンターで申告してくれた方には、図書館オリジナル「絵本のメモ帳」を1冊プレゼント!





「としょかん NEWS」に寄せられた教職員 50 名のエッセイが 1 冊に！

湘北短期大学図書館では、2005 年に「としょかん NEWS」を創刊し、発行を継続してきました。

2013 年より「連載リレーエッセイ」のコーナーを開始し、約 50 名の教職員にご寄稿をいただきました。教職員の方々には、お忙しい中、ご寄稿いただきましたこと深く感謝申し上げます。

今回の「としょかん NEWS」第 134 号（2020 年 7 月発行）のリレーエッセイは 50 回を迎えることができました。その記念として、高野瀬学長にご寄稿いただき、さらに、これまで「としょかん NEWS」に寄せられた「連載リレーエッセイ」全てをエッセイ集として一冊にまとめました。

本や図書館にまつわる興味深いお話がたくさん掲載されています。あの先生、あの職員の意外な一面や本や図書館に対するさまざまな想いを知ることができます。

サブタイトルは「どの本、読もうかな…」。本が好きな方はもちろんのこと、何を読んだら良いのか迷っている読書初心者の方にも、読書案内として役立つと思います。

エッセイの中で紹介されている本（一部除く）は、図書館に所蔵していますので、ぜひ、手に取って読んでみてください。右の「連載リレーエッセイ集」も貸出できます。カウンター前には、エッセイの中で案内された本を集めた展示コーナーを設けています。ご利用を心よりお待ちしております。



「連載リレーエッセイ集」
「どの本、読もうかな」

●連載リレーエッセイ 50 回記念、拡大特別号は高野瀬学長にご寄稿いただきました。

連載

リレーエッセイ vol.50

「ライ麦畑でつかまえて」

学長 高野瀬 一晃

リレーエッセイの寄稿依頼を受けて、思い返してみても 66 年の人生で読んだ本の冊数は、驚くほど少ない。生まれて初めて本らしきモノを読んだのは、中学校 2 年生の夏休み。それまでは、航空図鑑、魚類図鑑など、興味あるアイテムの図鑑しか観た事がなかったし、文字だけの本は見ない事にしていた。中 2 で初めて本を読む事になったのは、夏休みの読書感想文の宿題にしかたなく応じたから。神楽坂の本屋で選んだのがハイエルダールの「コンチキ号漂流記」。選んだ理由は、字が大きく、本を開くと半ページには写真が掲載されていたからで、厭々だった。しかし読んでみると、南米から海流に乗って海洋を漂うコンチキ号が遭遇する巨大なジンベイザメの大群や不思議な夜光虫、そしてイースター島のアモイ像の話など中々面白かった。漂流記に味をしめて次に読んだのが「十五少年漂流記」。のちのち PS のシミュレーションゲームに嵌まるのだが、良く考えてみると自分にとって本の楽しさ、それは「疑似体験」だったのだろうと思う。その後も、余り本は読まなかったが、高 2 の時に、従兄から薦められて読んだ J.D.サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」（白水社版、野崎孝訳）には、完全に嵌まった。多分 20 回ぐらいは読み返したと思う。そして、最後は、銀色の表紙のペンギンブックスで出ていた原書「The Catcher in the Rye」を読んだ。英語の小説なのに楽勝で読めた。当たり前だよ。何回も読んで、中のセリフまで覚えていたからね。

物語は、第二次世界大戦に勝利してアメリカが一番輝いていた頃、1950 年代の東部の私立高校（ペンシー高校）に通う 17 歳の高校生の話。高校を退学になった主人公ホールデン・コールフィールドがペンシー高校の裏山に置いてある鋳物製の大砲に座って、これまでに学校生活で起こった色々な「インチキ」な事を思い出している場面から話は始まる。裏山から降りたホールデンは、寮で同室の野郎と一悶着の後、余り乗り気ではなかったけど、少しは世話になった歴史のスペンサー先生の自宅に別れの挨拶をしに行く。スペンサー先生は年寄りで、呼び鈴をならすと少し胸を開けたガウン姿で現れて、胸に塗ったらしいヴェイクス・ヴェボラップの匂いがして、既にホールデンは、挨拶に行った事を後悔し始める。その後、列車でクリスマスの季節を迎えるニューヨークの自宅に戻る前に街を彷徨うんだけど、これがめっちゃ面白い。そんな物語です。ホールデンには妹のフィービーって子がいて、彼女とのやり取りも凄く楽しい。

本の原題「The Catcher in the Rye」は、直訳すれば「ライ麦畑の捕まえ手（捕まえる人）」でも邦題は「ライ麦畑でつかまえて」なんだよね。原題の意味は物語の中でホールデンによって語られます。邦題はともかくとして、翻訳した野崎孝さんの訳が素晴らしいです。是非とも一度、読んでみて下さい。そして、面白いと思ったら同好の士として、学長室のドアをノックして下さい。